

---

# 記憶の門

青蛙

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

記憶の門

### 【著者名】

N4157D

### 【あらすじ】

考えなしで行動していくも後悔するほめに陥るおれが過去に隠している事とは……。

青蛙

(前書き)

これは「門」を主題とする小説です。

しまつたと思つた時には俺は四角に切られた穴に落ちていた。 酷く尻をうちつけてしまい、大きく声を出したが誰もそれに応えてくれなかつた。 それから子一時間、大声で叫んだり、拳で壁を叩いたりしたが何の応答もなし。 はあと溜息をついて俺は腰を降ろす。

また、やつちやつたよ。

俺は小さい頃から考えなしで動いて後で大きなしつペ返しをくらうのが常だつた。 わかつてゐるのに止められない。 始まりは幼稚園。 送迎バスを待つて並んでいる子どもの列の一一番前に格好良く飛び降りようと滑り台からジャンプし、足を骨折。 乗りたかつたバスじやなくて救急車に乗る。

次は小学校一年のときだ。 誕生日に買つてもらつたゲームをやりたいばかりに担任が出張で自習になつた午後、誰にも言わずに家にあつさり帰つてしまい大騒ぎなる。 次いで間の小さいのは端折るとしてそれから五年後。

卒業式の掛け合いの言葉を自分の順番まで覚えていられない、俺は一番最初に言つてしまつた。 おかげで卒業生には怒りを買い、在校生には笑いをもたらし、保護者の皆様の失笑を誘つた。 そして中学に上がつたら上がつたでどうしても昼食時ピザが食べたくなる。 と、いうことで教室にピザ屋が来てこれまた一騒動になつた。

そして 一番の失敗は……思い出を探る手を無意識に俺は急いで引いた。 これは深くしまつておかなくては。 なぜか強くそう思つた。 そう、考え方だめだ。

とにかく今日だ。 冬休み中の今日が補習のある登校日だといつことに氣付いたのがいつも家を出る時間の十分前だつた。

「何で教えてくれなかつたんだよ」

「補習なんてあつたりなかつたり、 そんなの自分で管理してよ。 高校生でしょ、 いつもは構うなつてうるさいくせに」

今日はパートが休みのせいか、どっぷり休みモード全開で寝巻きがわりのスウェットの上下の母親がスッピンの薄い顔を新聞から上げる。

それこそ、こんなのに構っている暇はなかったと俺は大急ぎでシャツを着込んで制服のズボンを履き、靴下にとりかかるが。

しかし何で急いでいるときに限って靴下つてやつはするりと履けないんだ。かばんの中身も確かめないでコートを掴み、つんのめりながら靴を引っ掛けて玄関を出る。しかし、やっぱりこんな時に限って駅まで乗るつもりだった自転車の後輪のタイヤが……パンクしていた。

ジーザス。俺はそんなに悪い子ですか。

そりゃあ良い子では無いにしてもこの仕打ちはないじゃないですか。神に向かつて不平を言いつつもともかく、俺は走りに走つて駅を田指した。そして通りを真っ直ぐ行かずに曲がつてしまふ。ついにこっちに確か、駅への近道があつたはずだと思い出したから。すごい前に確かここを曲がったんだよ。

そして細い路地を走り出した俺を待つていたのがぽっかり開いた穴だった。

何に使つつもりでこんな物を作つたものか。穴の中は地下倉庫というには中途半端な大きさだ。ちょうど路地分の幅しかない上にがらんとしている。深さは三メートルから四メートルほどで路地自体が回りの雑居ビルに阻まれて日の光が届かず、薄暗いため穴の中は真っ暗に近い。

壁を触るどざりつとして、何箇所かに縫合田があるようだが平坦で手や足をかける溝なんかはありそうにない。焦つて今度は足で辺りを探つてみるとガラス瓶が音をたてて転がつた。

俺、このままここで死ぬのか。

そんなわけないのに極端なことまで考えてしまつ。そして……思い出す。

俺、やっぱりここへ来たことがある。

そうだ、五年くらい前に確かに俺はここにいた。忘れるわけがない、ただ忘れたふりをしていただけだ。心の奥の奥に仕舞いこんでいても俺はそこにあることをずっと意識していたんだから。ぴったりと門を閉めて。

五年前……。

誰か通らないかな。

小学生の俺はにやにやとしながら穴の近く、路地をふくべ勢いで置かれている大型のダストボックス横に潜んでいた。

冬休み、冬期講習とやらのために塾へ行く途中である。ふらりと入った路地裏。そこで見つけた四角くきつた穴にのせられているような鉄製の蓋が、微妙にズれていたのだ。

俺はその取っ手を引き起こすと、体を倒すようにして必死に引っ張った。何でみんな一生懸命そんな事をしたのか。今となつては自分でさえ謎だ。

そして本当にこんな所に人が来るなんてちつとも思つてもみなかつたんだ。ところがそこへ俺と同じくらいの小学生の男の子が某有名塾のかばんを背負いふらりとこちらに曲がつて来た。

そしてじつと穴をのぞき込んだ。俺は笑いを堪えながらそっと後ろから忍び寄ると大声を出す。

驚かすつもりで。本当に驚かすだけのつもりだった。

「わあああ

びっくりした? と聞こいつとした俺の目の前でそいつは落ちはしまつた。

それこそすとんと。

俺はそのとき、もつとも卑怯といわれる行動をおこす。つまり逃げた。

それから……怖くて一度と通るもんかと思つてたんじゃなかつたのかよ、ちくしょう。あのときのことをはっきり思い出して、俺はこの世界に一人だけ取り残されたような心細さを感じて上を見

上げた。

あいつも心細かつたんだろうな。まだ、十一か十二歳のころだ、もっと怖くて、もっと悲しかったはずだ。泣いて、叫んでも誰もこない。あれからじれくらいして助けられたんだろう? 助けられたんだよな。まさか……。

俺は慌てて立ち上がり注意深く辺りを見回す。

そんな、陸の孤島でも富士の樹海でも無いここは駅近くの路地裏だぜ。まったく俺ときたら小さい力キみたいに怯えてる。

反対を向こうとずらした足がみしつと何かを まるい棒切れのような物を踏んだ。

今のは何だ? 骨なのか? 心臓がばくばくいっているのを宥めながらそいつと下を見るが暗くて良く見えない。そこへ。

「あ、やっぱり落ちたんだ」

小学生らしい声が頭上から聞こえて、これで助かると顔を上げた俺はぎょっとしてのどが詰まる。人間、恐怖のどん底に落ちたら二通りの反応に分かれると誰かが言っていたっけ。大声をあげる者、声も出せない者。俺は後者のほうだったようだ。

助かつた、と思わなかつたのはのぞいた顔に確かに覚えがあつたから。

一瞬振り返つたやつの、昔俺が落とした子どもが見せた驚いた顔。俺の脳裏に焼きついているあの顔だつた。

「だいじょうぶ?」

その子が話すたびに背中に背負つたかばんが揺れて中で筆箱が音を立てる。ああ、そのかばんにも見覚えがあるんだ。

「ごめん、ごめんよ、寂しかつたろうね。俺、何でのとき誰か大人を見つけて助けてもらわなかつたんだろう。こんな所で長いこと一人にして ごめんよ、成仏してくれ」

それを聞いて穴をのぞいていた男の子がけだけたと笑い出す。「何を言つてゐるの? さみしいのはお兄さんのほうでしょ。ばつかみたい」

そう言つて男の子は後ろを向いて大声を出した。

「兄ちゃん、へんなやつが落ちてるよーつ。来て来て」

「おまえ、そこ、開けたらダメだろう。兄ちゃんそこへ音、落ちて大変だつたんだぞ。昨日話してやつたのは、危ないから近づくなちやだめだからだつたのに」

男の子の声の後にその背後から高校生らしい顔がのぞいて心配そうに声をかけてきた。

「大丈夫ですか」

「兄ちゃん、このお兄さんへんな事言つてたよ」

「変な事?」

「あの時、誰か呼んで助けてあげれば良かつたつて」

「え?」

俺の顔をまじまじと見てそいつははーん、と言つてこまつと笑つた。

「おまえ、ぼくをあの時に置き去りにしたやつだな。へえ、今度は自分が落ちたんだ、いい気味だぜ」

笑顔の兄弟を前に俺は幽霊の線が消えてほつとする間も無く、またもや窮地に追い込まれている。あいつの弟なら似てるよな。兄ちゃんが行つてた塾に弟もそりや行くかも しかしどうする。

「あのときはごめんよ、本当に悪かった。だから助けてくんない? むしがいいのは力いつぱいわかつているがそつ言つしかない、助けてくれ。

「断る、あのときは怖すぎておしつこちびりそうだつたんだからな。ちつとはそこで反省しり。行くぞ、洋介」

冷たい兄の言葉に洋介君はちびりと俺を見た。

「ええーつ、いいの兄ちゃん?」

「いいの」

「はーい」

弟は素直に兄の言葉に従い、一人の姿が俺の視界から消える。遠ざかる足音。はーい、つておい。本当に置いていくのかよ。絶望的

な気持ちでがっくり崩れて座り込んだ直後、俺の背中側の壁が軋んだ音とともに開いた　開いた？

そこから顔を出す頭にカーラーを巻いたおばさん、一人。

「あんた、落ちたの？」

「あ、はい」

「つたぐ、今度はどこのくそがきか、酔っ払いだい。蓋開けんじやないよ、まつたく。あんた立てる？」

「立てます。あの一つお聞きしたいことがあるんですけど」

「何？」

「この穴は一体何ですか」

「ここには隣のビルとうちの店を繋ぐ地下通路つるもんだよ、駅の下とかにもあんだろ」

「地下通路つて……。

「あの、何で蓋があるんですか」

「聞きたいのは一つじゃなかつたんかい。まあいうなれば採光と通気のためだよ。ちよつとずらじしくのがこいつだよ。わかつたらひさつさと来な」

おばさんはカーラーを避けながら器用に頭を搔いてふん、と盛大に鼻をならすと俺に背中を向けて歩き出した。その後を俺はとぼとぼとついていく。

ビルの薄汚い階段を上るとロッパーとは名ばかりですぐに玄関に出来る。あいつも五年前、こいつを出でていったのか。

俺は路地を出てふとおばさんにお礼も言つてなかつたことに気付いて引き返そうと振り向いた。

ところが薄暗い路地はしんと静まり返り、「地下通路」の上に置かれた蓋はいつの間にかわずかにずれて閉まっていた。

その蓋の前にカーテンコールの役者よろしくおばさんと高校生とその弟が立っていた。弟がひらひらと手を振つて俺は慌ててそれに応えるように頭を深く下げた。

何かおかしい。そう気が付いて頭を上げた俺の目の前の風景

は大きく変わっていた。

そうだよ、三年ほど前から始まつた駅前再開発で雑居ビル街は取り壊されて映画館を含むショッピングモールが今年開業したんだ。かわりに建つシネマコンプレックスを俺は楽しみにしていた。それは心のどこかでいつもひつかつていたもののせいだ。

自分の良い目とともに消えてしまえばいい、そう思っていたそんなこと、あるわけがないのに。俺の後ろ暗い記憶に決着をつけてくれたのは何の力によるものか。

今日、ここにこなれば俺はずっと心の深いところにずるずると嫌な記憶を飼つておかなくてはならなかつた。悪気は無かつたんだ、はずみだつたんだと自分にいい訳をしながら。俺の知らない振りといふ名の格好ばかり頑丈そうな門をきつちり閉めて門をかけて。でも良かつた、あいつ助かつていて良かつた。何か泣きそうになつて俺は涙をぬぐおうと右手を顔にもつしていく。

「やべえ、俺大遅刻じゃん」

ほのぼのと時計を見て自分はまだ電車にも乗つてないことに気付いて俺は走り出す。

そして　自転車置き場の横のわき道が目に入つた。あれは　絶対近道だ。

しまつたと思つのはこの後の事……。

おわり

(後書き)

読んでいただきありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4157d/>

---

記憶の門

2010年10月8日15時56分発行